



# 大本山永平寺



## 御征忌ごしよき

今月の二十九日は永平寺御開山である道元禪師さまの御命日をお迎えします。

法要は二十二日から一週間かけて、厳肅に勤められます。この大法要を『御征忌』といい、数多くの法要を勤めてご供養します。しかし、大法要のため、永平寺で修行する役寮、雲水だけではなく、関わりの深い僧侶の方がたにお手伝いいただき、綿密且つ荘嚴のうちに勤められています。幾百年も経つ末流の私たちですが、道元禪師さまをお慕いする心あらば「寸分の違いも起こさぬように！」と所作、お経の声、心に気を配り、粗相が無いように営みます。

鎌倉時代に、ここ永平寺で道元禪師さまは修行をされていました。

弟子と共に坐禅に励み、修行生活を営まれていたのです。

生活を共にされ、弟子の成長を見守り、喜ばれたに違いありません。一日一日が尊く、充実されていたことでありましょう。道元禪師さまは確信されていたことがあります。それは「私が授かった正伝の仏法は永久に続くものである」と。

現在その確信は事実となっています。次は私たちがその仏法を受け継ぐ番です。精進を誓いその日を迎えます。

※八月号三行目「著書」は「著者」の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。(出版部)



# 大本山總持寺



峨山禪師御誕生地顕彰碑



瑩山禪師御誕生地顕彰碑

## 御両尊の大遠忌 だいおんき

大本山總持寺では、平成二十七年に二祖峨山禪師六五〇回大遠忌、平成三十六年に開祖太祖常濟大師七〇〇回大遠忌の聖辰を迎えます。従って本山は九年の間に二度の大遠忌を迎えることとなります。

今日、我が国では解決困難な社会や経済の問題が続出しております。また、未曾有の国難である東日本大震災復興など当面の問題が山積する状況です。

そのような中で、二度の大遠忌を迎え、本山の存在意義を果たしていくには、長期的な展望をもって、じっくりと腰を据えて、さまざまな課題に取り組んでいかなければなりません。

これまで大遠忌は、単体の行持としてそれぞれ行っておりました。歴史的により確実な成果をなすという観点から、太祖と二祖の大遠忌を「御両尊の大遠忌」として約十年にわたる長期視点に立つて行っていくと考えております。古来總持寺では太祖・二祖を一体として崇め、「瑩峨御両尊」と尊称して参りました。二つの大遠忌を一体として考えることは、御両尊のご意志にも叶うことだと存じます。この約十年を費やして、果たすべき伽藍の維持修復などの普請事業・記念出版や講演などの文化事業・人材の育成などに取り組んでいきたいと考えています。

# 曹洞 俳壇

選・村松五灰子

そのうちに放す螢と歩きけり

佐賀県 池内 淳子

評 すぐ逃げるでもなく掌に青白く発光している螢。とらえるつもりもない。「そのうちに放す」と表現したところに、作者の少し嬉しさも漂うまろやかな一句となった。

屋敷神首折れてゐる葱坊主

愛知県 松井 暁美

評 屋敷神というも家の中に祀られている神ではなく庭に祀る祠や古木、石が神であったりする。その家の守護神でもある。そんな見慣れた屋敷畑。穏やかな日常の中の一景を葱坊主をもって表現。どこか懐かしい。

◆旧暦を守り山家の軒菖蒲 福島県 西木 甚

◆溝浚へ鮒追いまわし一休み 岩手県 関合 新一

◆蜘蛛の罫の一部始終を見る余生 愛知県 田中 澤子

◆書齋兼客間それから昼寝の間 秋田県 小田篤恭葉

◆寂庵を出る真つ白な日傘かな 宮城県 須藤智恵子

◆湧水にトマト踊らせ古寺かな 兵庫県 美濃 敏子

◆一枚の葉っぱを庵に蝸牛 山口県 糸山 栄子

◆坐禅行無になりきれず遠蛙 熊本県 福島 隆子

◆軒燕我が子の様に翔たせけり 長野県 下島 博

◆桜見え彼方に日本浮かび来る ロシアシベリヤ 井上 健一

\*選者吟

陵は古事記の世界あきつ飛ぶ

五灰子

\*作句小見

今年古事記編纂一三〇〇年とか。数年前、句友と奈良の山奥へ昭和五十四年に発見された古事記編纂の太安万侶の墓を見に行きました。急な斜面のお茶畑にありました。「こんな山奥に」と不思議な思いでした。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

もぎ立てと野良着のままに持ちくれしトマト  
ト二つに陽の温みあり 新潟県 森村 ひろ

評 畑仕事の帰路に立ち寄って、もぎ立てのトマトを作者に届けた「野良着のまま」の人、その顔の表情までよみとれそうなる上旬。またずつしりと持ち重りするトマトの充実した様が「陽の温み」から伝わってくる。

追ひつきし知人は遅きわが足に歩みを合は  
せ津波を語る 岩手県 関合 新一

評 作者は岩手県久慈市にお住まい。久慈川を逆流する津波の映像に息を呑んだことが蘇った。作者の周辺には被災者が大勢いるのだらう。突然日常を奪われた口惜しさ、悲しみは尽きない。

- ◆夕光のすすきの原に立ちて吹く夫の口笛風に消さるる 山口県 中井 清子
- ◆見あぐれば星空がよく見える町空き地空き家の多くなり 広島県 日松 弘
- ◆昼寝の兎いまこのときも育ちをり青田の風に吹かれず 秋田県 小田 篤恭

※八月号の選者詠「猪に掘り〜」は「猪に掘り」の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。(出版部)

◆遠目には明るき花の盛る如し海辺の里の古き枇杷の木 愛知県 重野 宏美

◆庭に置く水盤に水滴たしおくやがて小鳥が水浴みに来む 東京都 福島 秀雄

◆雨上がりの松葉の先はきらめきて水提灯をともしてゐたり 福岡県 三吉 誠

◆デパートの自動ドアが幾たびも透明人間運ぶ夏風 福岡県 大槻 弘

◆初恋を言はざるままに嫁ぎたり夢にて逢へば手をつなぎをり 東京都 石場に子

◆棄て畑勿体なくて暇つぶし誰でも採らんしよ南瓜を植える 福岡県 西木 甚

◆抽象画を解せぬままに会場を出れば五月の風吹き渡る 静岡県 高尾 善五

\*選者詠

砂噛みしままの牡蠣殻拾い来て真水に洗う  
その凹凸を ちづ

\*作歌小見

宮城県仙台市の荒浜海岸で拾って来た牡蠣殻、震災後一年を経て訪れた時のもの。大津波に襲われ命を落とした人びとの無念の塊のような小さな牡蠣殻。ペンケースの中で、次第に白く透き徹ってきました。心から御冥福を祈ります。